



2021・8・1

第 417 号

101-0065 東京都千代田区

西神田 2-5-7 神田中央ビル 303

TEL 03-3221-5075

FAX 03-3221-5076

憲法を守る政権樹立する総選挙に

猛暑の中の行動に激励も

【青森県／青森県九条の会】

青森県九条の会は 19 日、戦争法（安保法制）廃止を求めるスタンディング行動を青森市の駅前公園で行いました。うだるような暑さの中、11 人が沿道に並び「アベ政治を許さない」「市民の力で戦争放棄の 9 条改悪をやめさせよう」などのポスターを掲げてアピール。

リレートークでは、「国民の多くはオリンピックの中止・延期を求めています。今からでも中止を」「感染を抑えきれない問題を棚上げにし、憲法のせいにする政治家に憲法を語る資格なし。総選挙で憲法を守る政権へ代えよう」と力強く訴えました。

迫力ある訴えに一礼する人や「暑いから気をつけて」と激励する通行人の姿が見られました。

野党共闘の深化さらにすすめ

【長野県長野市／若槻地区・吉田地区憲法 9 条の会】 19 日、猛暑の中、戦争法廃止をめざす宣伝行動に取り組みました。

菅首相「コロナ後に改憲」の決意

菅首相は『文芸春秋』編集部などの経歴をもつ花田紀凱が編集長を勤める改憲派向けの雑誌『月刊 H a n a d a』9 月号のインタビューに登場。八百長問答を展開しています。

改憲について問われた菅首相は、「自民党は結党以来、党是として自主憲法制定を掲げていますので、憲法改正に向けて取り組んでいく。その方針は全く変わりありません。いま自民党は改憲 4 項目(①自衛隊の明記②緊急事態条項③合区解消・地方公共団体④教育充実)を出しています。新型コロナウイルスに打ち勝ったあとに、国民的な議論と理解が深まるよう環境を整備し、しっかり挑戦したい」と述べました。

同時に菅首相は 4 月の日米首脳会談で、「私から事前に『これだけは言おう』と決めていたことがある」と述べ、「それは日本の立ち位置、即ち日米同盟が基軸だ」と、日米軍事同盟の忠実な担い手となることを誓約したと明らかにしました。

7人が「野党連合政権実現で憲法9条を守ろう」「NO！戦争法」の横断幕やプラスタワーを持ってアピール、6年前の戦争法強行採決以降、19日に宣伝を続けています。

市議の滝沢真一さんも参加し、参院長野補選などで深化した野党共闘について「戦争法廃止の一致点で始まった野党共闘は、たたかいの中で原発ゼロや消費税減税など共通政策が進んだ」と訴え、きたる総選挙で野党連合政権の樹立を呼びかけました。

リレートークでは、日本会議所属の国会議員などに触れ、「6年前に戦争法を可決した自公政権をなんとしても代え、きたる総選挙で戦争法を廃止する野党連合政権を樹立しよう」と訴えました。

核禁条約棚上げは被爆国の恥

【奈良県広陵町／広陵九条の会】 7月の19日の日行動をエコールマミ2階通路で17:00～17:45まで行いました。夕方からは言えまだけっこう暑かったです。

そんな中、8人の参加でスーパーメガホン宣伝とビラ配布、2つの署名（改憲発議反対署名と日本政府に核禁条約の批准を求める署名）に取り組みました。

マイク宣伝では2人の弁士が、“新型コロナ株急拡大の中、オリンピックより命が大事、オリンピックは中止を！”“コロナ危機や中国の軍事行動を利用した憲法改定の動きをきっぱりやめさせよう”“今年1月すでに国際条約として発効している核兵器禁止条約に背を向けている日本政府は唯一の被爆国として許されない態度、直ちに批准するよう要求しましょう”“今年秋までに必ず実施される総選挙で、市民と立憲野党

の共同を広げ、菅自公政権を退場させ、野党連合政権を誕生させるため力を合わせましょう”などと訴えました。

時間帯のせいか人出がかなり少なかつた中、ビラ配布60枚、改憲発議反対署名9筆、核禁条約批准を求める署名が4筆集まりました。（下村敏之）

コロナにも老いにも負けず

【山梨県／山梨女性9条の会】 山梨女性9条の会は、九条の会アピールに賛同する16名の呼びかけ人で2004年12月発足。以来澤地久枝さんをはじめ様々な方の講演会や学習会など毎年開催してきました。地元「山梨日日新聞」への意見広告にも取り組み、県内「9条の会」に呼びかけて、2013年「憲法9条を守る」、2014年「NO！集団的自衛権・戦争する国はいやです」を5000人近い賛同者を得て見開きで出しました。また戦争法に反対する山梨女性182名のアピール発表や戦争法廃止2000万署名、安倍9条改憲NO！3000万署名など、県内女性団体にも呼び掛けて取組んできました。2016年と19年の参議院選では野党共闘の候補者を支援して力を発揮しました。

昨年8月の安倍首相の退陣表明に「バンザイ、バンザイ」です。2006年9月第一次内閣発足から9条改憲を願ってやまない安倍首相に、「戦争する国はいやです」「9条改憲NO！」と山梨から発信してきた14年間、「長かった」というのが実感でした。

2020年は「改憲発議に反対する全国緊急署名」に取り組んだものの、新型コロナの感染拡大や安倍退陣で1年間ほぼ休業状態でした。「集って意見交換をしたいね」の声

で今年3月から活動再開。4月には県内野党を訪問し、衆院選での野党共闘のための「政策協定と候補者の一本化を早急に行うよう求める要望書」を手渡し懇談してきました。残念ながら山梨はまだ野党統一候補が見えてきません。

5月3日憲法の日には発表された九条の会アピール「今こそ市民が声をあげるとき」を読んで触発されました。菅政権のもとでおきている「新しい段階」の情勢をしっかり学びたいと、7月24日渡辺治さんを講師にお迎えして講演会を開催しました。県下各地の9条の会の方々も参加され、会場定数50のところ出席者は51人になりました。

80分を超えるお話、参加された方々のアンケートには「こういう話を聞きたかった」「日米関係の新段階についてたいへん良く分った」「戦争できる国づくりが進められていく情勢を人々に伝えていくことが大事だと思った」「菅政権を続かせてはいけないことを痛感した」などの声が寄せられました。

コロナのため会場に人数制限があり、参加できなかった人には講演の内容をお伝えしていこうと検討中です。

結成以来16年余、老いは避けられませんが、「菅改憲NO!」「改憲派議員3分の2の議席獲得を阻止」の思いを強くして頑張ります。（中岡晴江）

学術会議会員任命拒否を糾弾

【東京都足立区／千住九条の会】 7月18日、小澤隆一氏をお招きし「憲法を壊す政治と生かす政治 そして私たち」の講演会を開催しました。コロナ禍で入場制限がありましたが、学術会議任命拒否の当事者

のお話を伺いたいと60名が参加しました。

小澤氏は、この間、学術会議の連携会員として12年間活動されてきたこと、学術会議とは、政治から独立した学術の立場から意見を述べて国民にも問題提起をしていく役割を担っていると述べました。違法な任命拒否、「学問の自由」を侵害する菅首相の本質が明らかになった。今後は審査請求をおこなっていくと決意を表明しました。

また、安倍政権継承の菅政権は憲法破壊の姿勢をあらわにしていること、特に危険な動きは安保法制を発動し日米軍事同盟の強化を推進しようとしていることは、中国に対するアメリカの戦争に日本が武力で加担する危険が増大すると指摘し、コロナ対策や人々の命と暮らしを守る支出に回すべきと強調しました。更に、「敵基地攻撃能力論」についても解説、軍備拡張の負の連鎖を断ち切るためにも北東アジアの軍事同盟体制解消こそが求められると述べました。また、コロナ禍の惨事便乗型改憲論、緊急事態条項と9条改憲の関係を解き明かしました。

参加者からは、多くの質問とともに、「先生のお話はわかりやすくてのしかった」「任命拒否された当事者のリアルなお話を伺えてよかった」などの感想がだされました。（千住九条の会 中田順子）

都議選勝利受け意気高く

【東京都文京区／本郷・湯島九条の会】 レーダーに雨雲が映っているもとでの「本郷・湯島九条の会」の定例の昼街宣になりました。都議選で日本共産党・立憲民主党が自民党の議席を上回り、自民党は1

人区で2議席しか取れないという大敗を喫し、文京区では日本共産党の福手ゆう子氏がトップ当選したあとの街宣になりました。

7人の方々が参集しました。プラスターを持つ人マイクを握る人、それぞれが新型コロナ禍再拡大のもとでの東京オリンピック・パラリンピック中止を訴え、改定国民投票法を糾弾しました。

東京五輪を10日後にひかえ、コロナ禍での中止を熱く訴えました。このままでは日本発で世界中に感染爆発を拡散してしまう危険性を告発しました。衆参両院での憲法審査会で改定国民投票法を成立させ、一路戦争路線を突っ走る菅政権を糾弾しました。さらに今の日本で最も大事なことは一日も早く政治の「民主主義」を勝ち取ることだ。菅政権は違憲状態の内閣であり、即刻政治の舞台から退場させることが肝要だ、いまこそ全力を尽くそう、と訴えました。

そして憲法9条を持つ日本がいま果たすべき役割は、米中をはじめとした戦争ありきではなく、外交努力が不可欠であること、そのためにはわたしたちは「国際法」を使って紛争を解決する努力が求められていること、などを訴えました。

そして来る総選挙で「市民と野党の共闘」を土台に「野党連合政権」をつくり、安倍・菅政権がつくってきた違憲立法を廃棄し、文字通り立憲民主主義政体を実現することを目指すと強く強く訴えました。

(「九条の会メールマガジン」350号)

《全国首長九条の会メッセージ》 軍隊を動かす側の野生の本性

元鳥取県智頭町長 織田 洋

「あんなことは、日本もしていた」、50数年経っても未だに忘れられない言葉である。

それは1968年3月ベトナム戦争の最中、南ベトナム・ソンミ村大虐殺事件である。中国を転戦したという叔父は淡々とした口調ではあったが、私には衝撃の言葉であった。ベトナム戦争は国際世論の猛反発をかって、米国の撤退で終結したが大戦中の日本軍も同じようなことをしていたと想像するとその後が続く言葉が出なかった。叔父は当事者だったのかそれとも傍観者だったのか思い出したくないことだったのかそれ以上話すことはなかった。私も胸の内に納め今日まで誰にも話すことも無く過ごしてきたが、人間の体に流れる野生の血を少しでも薄めることになればと思っている。

「国民の命を守る」、コロナ禍でもよく耳にする言葉であり一見正義の味方のように思うが、守られる命もあるがあまりにも粗末に扱われる命がある、それは沖縄戦で軍隊の盾にされた人達、軍事クーデターで権力を掌握したミャンマーの国軍は権力保持のためには国民に銃口を向け命を奪う。軍隊を動かす側が持つ野生の血の本性であり、これが軍隊の有様であることをまざまざと見せつけられた思いだ。

今私たちは核兵器、環境破壊と向き合っている、理性と英知を持って野生の血に勝たなければ遠からず人間は人類という種を滅亡に追い込むことになるだろう…。日本の進むべき方向は平和憲法を盾と矛にして人類が生き延びていく道を作っていくことではないだろうか。

(「全国首長九条の会ニュース」第22号)